青森県立十和田工業高等学校

住　所　十和田市大字三本木字下平二一五の一
生徒数　男子七七八名　女子六四名
部員数　男子二〇名
顧　問　円子　一彦・横浜　敏彦

今から十年程前のことだったと思うが、偶然にも八戸市民体育館で行われていた高校の空手道大会を観戦する機会に恵まれた。自分で少し空手の経験があったので、非常に興味深くまた、高校生が精一杯試合する姿に深い感動を覚えた。

この時に何とか自分の高校にも空手道部を創設し、試合に出してみたい想いにかられたのが部創設のきっかけであった。

しかし当時本校には全国優勝を何度もしている少林寺拳法部があり、一般から見れば空手と少林寺拳法は同じに見えるのではとか、果たして部員が集まるかどうか、また学校の許可が出るかどうか、難しく感じられることが多かった。

そうでなくても部を新設するということは容易ではなく、意外な抵抗問題もあるもので、いろいろな角度から検討し、計画をつくり、いつでもスタートできる態勢だけはつくっておいた。

そして昭和五十九年に自分が一年生の担任となったのを契機に自分のクラスを中心に部員を集め愛好会として何の抵抗もなくスムーズにスタートした。練習場所も剣道部が半分提供してくれたりとか、学校各方面からもずいぶん協力してもらえ何事も順調に行き予想よりはるかに恵まれたスタートとなった。

しかしスポーツ化された空手の試合のルールが解らず、ともかく一年間は基本の練習だけをやっていた。

そうしているうちに生徒が試合をしてみたいというので、当時の三本木高校の小井川先生にお願いして試合をしてもらい、組手の指導をお願いしたことがついこの間のような気がします。

この時の試合は試合にならず惨憺たるもので見るにたえない程であった。しかしこの事が非常によかった。次の日から生徒達の目の色が変わってきた。何とかして試合に勝ちたいと思ったのであろう、私の目からみても厳しい練習になっていった。何よりも生徒達が自主的に考えて練習をするようになった。このことが何よりも大きな収穫であった。

練習のかいあってか大会でも何とか一回戦は勝てるようなチームになっていた。いよいよ部として認められ、発足して三年目、昭和六十一年の高校総体では順調に勝ち上がり、まさかと思っていた優勝候補の八工大一高を破り、三位入賞を果たしたのである。これは生徒にとってもまた私にも奇跡としか思えないことであった。試合が終わっても生徒達はほんとうに勝ったのかという顔をしていたのが今でも忘れられない。このことが学校での空手道部の存在を非常に大きなものにしてくれた。以上が部創設当時の思い出である。

その後印象に残っていることを少し書いてみたいと思う。

空手部一期生の先輩達を目標に後輩達も努力したのだが、なかなか良い成績を挙げるまでに至らない状態が続いた。

そんな状態の中で平成元年には個人型でインターハイへの出場

権を獲得してくれて、初めてのインターハイ出場選手を出した。考えてもみなかったことなので、当時は驚いてばかりいたような気がします。

ところが平成二年の秋季大会ではまた予想外のことが起こってしまったのである。この大会は日程が変更になり、大会二日目には修学旅行の出発と重なってしまった。組合せをみると二回戦でシード校の光星学院との対戦になるので、勝つ可能性は全くなかったので、安心して二年生を出場させたら勝ってしまい、そして勝ち上がり、次の日も試合しなければならなくなった。修学旅行に参加するか、棄権するかどたらにすべきか校長に相談したところ、快く試合に出場できるように取り計ってくれ、修学旅行にも一日遅れて参加できるようにしてくれたのであった。あの時は何と言ったらよいかほんとうに感謝の気持ちで一杯でした。その好意もあってか、生徒は頑張り決勝まで進んだが残念ながら準優勝に終わった。しかし初めて東北選抜大会への出場権を獲得できた。そして仙台での選抜大会に臨んだところ順調に勝ち進み強豪東海大山形を下し決勝まで進んだが、決勝では惜敗してしまう。ここでまた運よく全国選抜大会への出場が決まったのであった。私としては何と運の強い連中であろうかと感じられてならなかった。

私にとっても生徒にとっても全国選抜に出場できることなどは夢にも思わなかったことであった。何はともあれ武道を志す者にとって日本武道館で試合できることは夢であり、生徒にとってはおそらく二度とないと思うから全力を尽くすように激励し、全国大会に臨んだが雰囲気に圧倒されたのか、一回戦で三対二で惜敗してしまった。しかし生徒にとっては全国レベルを知ることができたと同時にいい思い出になったと思う。

平成三年の高校総体では二回戦で八工大一工と代表決定戦の末に破れ、生徒達の涙を流す姿を見たら、今までのどの勝利よりも胸にジーンとくるものを感じた。この試合は私によくここまでやってくれたという不思議な満足感を与えてくれた。こういう気持ちだから大事なところでは勝てないのかも知れないなと自分で思ったりもする。

しかし試合に勝つだけでなく、何かしら高校時代の思い出に残るような試合をして、卒業してくれればと常に思って指導している。

以上今までに感じたことを全く自分の主観だけで雑記しました。

二十周年を一つの節目として今後も頑張っていきたいと思います。